

年中行事（年末年始2）

大野城市教育委員会

大野城市周辺の年始行事の様子を紹介します。お正月は、歳神または家の先祖の霊を迎えるための大切な行事としておこなわれてきました。今では簡略化されつつある風景ですが、ご家庭ではいかがでしょうか？

アキホ詣り（初詣）・若水くみ：1日（元日）は、神社や地区の氏神様に詣る初詣をします。これを畑詰・中・釜蓋では「アキホ（恵方）詣り」と呼んでいましたが、その年の福をつかさどる神様の方角であるアキホでなくても良かったようです。

また、1日（元日）の朝早くに、家の主人が井戸水を汲む「若水くみ」をおこないました。汲むときに、アキホを向くところと、東方を向くところがあったようです。白木原・雑餉隈・畑詰・乙金等では、この水で顔を洗うときに新しい手ぬぐい（「若水手ぬぐい」）を使いました。



御潮井とり：浜の清浄な砂を採ることを「御潮井とり」といい、この砂を身体にふりかけることを「砂ミソギ」といいます。本来、海辺でおこなう行事ですが、大野城市周辺では、近くの川でおこなっていました。1日（元日）に、瓦田では牛頸川、釜蓋では汐井川・雑ヶ尾川から「オシオイ（砂）」をとって神前に供え、その後各戸に配りました。また、畑詰では「若シオとり」と呼び、御笠川からオシオイをとり、神棚に上げました。

雑煮・栗箸：1日（元日）に、お屠蘇を頂いたあと、雑煮を食べます。汁はスルメ・コンブのダシ、餅は煮たものを用意しました。そして、スルメ・コンブを椀の底に置き、餅とともに食べました。牛頸では、理由はわからなくなっていますが、雑煮を食べない家があったようです。

お箸は、栗の木の枝の両側を削った栗箸（栗ハイバシ）を使いました。この栗箸には「クリアイ（やりくり）がいいように」とか「マンガリ（家計のやりくり）がうまくいくように」との願いがこめられていたようです。7日まではこの箸を使用し、ほかの箸は使用しなかったようです。



ナイゾメ・風呂焚き（初仕事）：成人男性は、2日の早朝3時～5時に起きて、藁を打ち、藁細工（縄・草鞋等）を作りました。初仕事です。「ナイゾメ」と呼んだのは、縄をなう作業が男性の仕事の代表させた言葉だからだそう

です。また、女性の初仕事は、男性が仕事をしたあとで風呂に入るので、朝に風呂を焚き、風呂の準備をすることでした。

毘沙門参り：牛頸を除く地域で、3日に、大城山（大野山：標高410m）の毘沙門堂へ参拝する風習があります。早朝の暗いうちから山に登り、毘沙門堂に参拝して一家の繁栄を祈願します。

そして、神前のお賽銭（お金）を借りて下山し、翌年の参拝時に借りてきたお賽銭を倍額にして返します。このお金を借りてくるのは富貴を祈るためであり、倍額にして返すのは感謝の気持ちであらわすためです。現在も、毘沙門参りをおこなっている人はいますが、お賽銭を借りてくる風習は次第になくなりつつあります。

七草汁：7日に、茹でた七草を「唐土の鳥と日本の鳥が渡らぬさきに七草たたけ」と唱えながら、まな板の上で包丁の背とシャモジでたたき、この日までつくらなかった味噌汁に入れて食べました。七草とは、この時期に採れるセリ・ナズナ・ゴギョウ・ハコベラ・スズナ（蕪）・スズシロ（大根）・ホトケノザのことで、前日に用意しました。この七草汁に餅を入れて食べる地域もあったようです。



また、この日に七草のゆで汁は、風呂に入れたり、爪につけたりしました。はっきりとした理由はわかりませんが、手足の病気をしないと考えられていたためようです。上大利・畑詰では、元日から爪を切らずに過ごし、7日に初めて爪を切る家もありました。

ホンゲンギョウ（どんど焼き）：6日に竹と藁を準備し、7日朝早くに、正月のしめ飾りなどを焼きました。むかしは、集落の三叉路で、集落の組ごとあるいは近隣数戸の共同でおこなっていたので、集落に何組もできていました。



「ホンゲンギョウで焼いた供え餅を食べると、その年は風邪をひかない」といわれ、この火で各家庭の供え餅などを焼き、十分に焼けていない場合は持ち帰って焼き足し味噌をつけて食べました。仲島ではこの味噌を「オニミソ」といいました。

また、子どもたちは、2日に書いた“書初め”を焼いて、その燃え残りが空高く上がれば習字の兆しとして喜びました。

この風習は一時絶えていましたが、最近では公民館単位の行事として復活しつつあるようです。

【参考文献】大野城市教育委員会『大野城市歴史資料展示室解説シート 民俗No.1』

大野城市『大野城市史 民俗編』平成2年

石田繁美編『家族で楽しむ日本の行事としきたり』ポプラ社2005

(H24.03)